

## 2026 年度 一般選抜 I 期(1/26) 国語 出題意図

### 大問一 出題意図（問題一全体）

問題文は、生物分類学の歴史を通じ、科学がいかに人間の認識能力や技術的制約に依存して構築されているかを論じた文章である。リンネの分類から顕微鏡の普及、さらに DNA を解析するシーケンサーの登場に至る科学的パラダイムの変遷を辿り、既存の学説が崩壊し新たな知見へと更新されていく科学のダイナミズムを論理的に読み解く力が求められる。

### 出題意図（個別問題）

問一：文脈に応じた適切な漢字（軌跡、打撃、瓦解）を選択する表記能力を問うた。

問二：接続詞。逆接（しかし）、対比（一方）、換言（つまり）などの論理展開を示す語句を補う力を問うた。

問三：接頭語・接尾語（体系的、階層的など）の知識を用いて、適切な語彙を構成する力を問うた。

問四：文脈把握。「科学は人間の認識できるものに基づいて構築されている」という筆者の科学観の本質を理解しているかを問うた。

問五：比喩表現の理解。「胎動を始める」という言葉が、新しい学問が水面下で生まれ動き出す様を意味することを的確に捉える力を問うた。

問六：指示語の理解。「この説」が直前に述べられたホイタッカーの「五界説」を指し

ていることを特定する力を問うた。

問七：記述問題。生物の分類が今後も増える理由について、観察機器（顕微鏡、シーケンサー）の発展とそれに伴う人間の認識範囲の拡大という文脈から論理的に説明する表現力を求めた。

問八：内容合致。本文で述べられた科学史の事実や筆者の主張と整合しない選択肢を見抜く読解力を問うた。

## 大問二 出題意図（問題二全体）

問題文は、日本語における漢字・ひらがな・カタカナの三種の文字が持つ固有のニュアンスと、文字が言語世界をいかに構築しているかを論じた文章である。「桜」「さくら」「サクラ」の表記の差異がもたらす抽象と具象、遠景と近景といった美学的な重層性を理解し、文字と表現の不可分な関係を構造的に読み解く洞察力を問うた。

### 出題意図（個別問題）

問一：文脈に応じた適切な熟語（特異、依存、変貌）を選択する語彙力を問うた。

問二：接続詞。話題の転換（一方）や例示（たとえば）などの論理的関係を把握する力を問うた。

問三：指示語の理解。「それら」が表音文字としての「ひらがなとカタカナ」を指すことを文脈から読み取る力を問うた。

問四：対比構造の把握。ひらがなの「さくら」が日常的で近景的（具象的）なニュアンスを持つことを、「桜」との対比から理解する力を問うた。

問五：段落挿入。カタカナの成立や役割（漢文訓読）に関する段落が、文脈上どこに位置づけられるべきかを判断する論理構成力を問うた。

問六：文章構成の理解。前半の抽象的な議論と、後半の「桜」を用いた具体的な議論が、筆者の主張とそれを支える事例という関係にあることを俯瞰する力を問うた。

問七：結論の把握。「文字を書くことによって日本語がつくられ、その存在が支えられている」という筆者の言語観の核心を理解する力を問うた。

**大問三 出題意図（問題三全体）** 四字熟語の正確な知識と、近代文学作品を用いた品詞の識別能力を問う問題である。

**出題意図（個別問題）**

問一：四字熟語（一蓮托生、臥薪嘗胆、付和雷同、捲土重来、泰然自若）について、前半に対応する後半の語句を正しく選択し、完成させる語彙力を問うた。

問二：有島武郎の文章を題材に、文中における語句の品詞（名詞、形容動詞、形容詞、動詞、副詞など）を文法的に正確に識別する力を問うた。